

【留学先紹介】

臨床に触れられる留学を

東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

笠 井 督 雄

St. Luke's-Roosevelt Hospital Center は Columbia University College of Physicians and Surgeons の関連病院で、1979 年 St. Luke's Hospital と Roosevelt Hospital の合併により 1,076 床となりました。年間統計によると、外来患者数 44,000 人、入院件数 47,000 件、救急搬送患者数 321,000 人、救急室受診者数（救急搬送を除く）109,300 人、平均在院日数 5.95 日、手術件数 35,000 件（2000 年）で、手術の約 2/3 が救急搬送例で、ニューヨーク市の高度 trauma center に指定されています。

教育病院としての歴史は古く、1846 年の設立から 13 年後、20 床で開院した翌年の 1859 年には指導医制、インターン制が始まり、1947 年より Columbia University の教育病院に加わっています。現在約 1,200 人の指導医が登録されており毎年 463 人のインターンおよびレジデントがトレーニングを受けています。Cardiology のフェローは特に人気が高く、なかなか minority の入り込む余地はないようです。治験も盛んで、現在 Cardiovascular Surgery ではロボットと内視鏡を組み合わせた非開胸冠動脈バイパス術が行われており、成績も良好なようです。築地の聖路加国際病院とも関連があり、年に 1~2 回 educational faculty の交流があり、米国の指導医が招かれて教育講演や bed side teaching が行われています。

私の所属する放射線科核医学部門では年間 8,500 件の核医学検査が行われ、その半数は心臓核医学検査です。さらに関連 imaging center から診断を依頼され転送されてくる画像が 1,500 例程あり、その 7 割が心臓核医学検査です。最近 PET を備えた画像診断センターがオープンし、その画像もコンピュータネットワークを介してみる事ができます。Director の E. Gordon DePuey は、gated-myocardial SPECT のパイオニアの一人

で、Columbia University の教授も兼任されており、2002 年の米国心臓核医学会の会長も務められます。

私はリサーチ・フェローとして所属しています。週に 1 回 Physics in Nuclear Medicine の講義があり、Nuclear Medicine のレジデント、Cardiology および Nuclear Cardiology のフェローとともに参加していますが、chapter ごと、2~3 週間に 1 回試験があり成績が悪いと追試もあるため大変です。その他 Radiopharmaceuticals の講義が月 1 回あり、毎朝 8 時前からエコーや内科一般その他のカンファレンスが行われており、職員は誰でも参加できます。特に水曜日の Ground Round in Cardiology と木曜日の Ground Round in Medicine は、Harvard や Johns-Hopkins, Michigan など他施設も含めて選ばれたその方面のエキスパートを講師として招いて行われるため、最新のトピックを学べます。

さらに St. Luke's-Roosevelt Hospital Center は生涯教育の施設としても認定されており、開業医やフェロー、レジデント、学生、コメディカルを対象とした教育シンポジウムも主催しており、フェローやレジデントは低料金で聴講することができます。またニューヨークではアメリカ心臓協会が主催する心臓病のシンポジウムや、米国核医学会、米国心臓核医学会などが主催する教育シンポジウムなども盛んに行われており、地の利を生かして地下鉄やバス、友人の車に同乗するなどして気軽に参加できるところも今回の留学の魅力の一つです。

私の研究は、札幌医大の中田智明先生らのグループが開発した gated-SPECT 解析 program “p-FAST” を使って心機能評価を行い、他の測定法との比較を行っています。米国では死因の一位は心疾患であり、その医療費も高額なため研究も



左が Director の Dr. DePuey, 右が PhD の Dr. Friedman

盛んです。最近注目されていることの一つに慢性心不全に対する両心室ペーシングがあります。dyssynchrony を伴い、ejection fraction (EF) < 35% の症例に適応があり、左室の resynchronization に伴って心機能が驚くほど改善します。今回の研究では dyssynchrony 症例の EF 測定において、2-dimensional base の心エコーその他の測定法では 3-dimensional base の方法 (p-FAST や Quantitative Gated SPECT; QGS) に比べて過大評価されることを確認しました (2002 年 9 月の米国心臓核医学会で発表する予定です)。

ニューヨークはご存知の通り“人種、民族のるつぽ”であり、様々な国と地域の出身者と意見交換できたり、その国の文化に触れたり出来ます。美術館には一流の絵画が展示され、博物館には発掘された本国にもないようなものまで展示されており、音楽は classical から jazz、舞台はバレエ、オ

ペラ、Broadway musical まで、芸術、文化の面でも上質のものが揃っており、しかも日本より格安で観賞できます。

留学を“人生をより豊かなものにするもの”と捉えれば、ニューヨークはうってつけの場所です。日本の卒後教育も我が慈恵医大を中心に改善されつつありますが、まだまだ米国の教育システムから学ぶべきことは多いと思います。今回の留学は基礎と臨床の中間のような形ですが、後輩の皆さんには是非臨床にも触れられるような形で留学されることをお勧めします。

末筆になりましたが、この様なすばらしい留学の機会を与えてくださいました望月正武教授に、また様々な面でサポートしていただきました慈恵医大に深く感謝いたします。